

(60) 東京から アンカレジを まわって ロサンゼルスへ 向かう。

(61) 東京から アンカレジを めぐる ロサンゼルスへ 向かう。

(61)の例も同様であって、アンカレジで降りて町を尋ねてからロサンゼルスへ向かうことになってしまう。

以上より「まわる」「めぐる」がいっしょに使われる場合の違いをまとめると、「まわる」は移動することに意味の中心をおき、「めぐる」は状態や時間に意味の中心をおく、そして、探訪のニュアンスをこめることがある、ということになる。

2. 4. 文体差など

例(18)で「盃がまわる」という用法をあげたが、これは有名な土井晩翠の「荒城の月」では、

(62) めぐる盃影さして昔の光今いづこ

というように「めぐる」が使われている。この詩は文語によって構成されており、「盃がめぐる」というのは文章語的表現である。現在の口語では、「盃がもうめぐってきた」などはちょっと言いづらいのではないだろうか。この文章語的な感じは前章であげた「めぐる」の諸例にも感じられる。

(63) 中心に燃える一本の蠟燭の火照に

めぐりつづける廻燈籠 (『伊東静雄詩集』新潮文庫 1975 p. 124)

これも「まわりどうろう」というように、口語の世

界では「まわる」を使うのが普通である。

しかし、現在「まわる」であらわされる意味を、かつては「めぐる」もになっていたのである。

(64) …大井の土民におほせて水車を作らせられけり。
多くの足を賜はりて日数経て営みいだしてかけたりけるに、おほかた巡らざりければ、とかくなほしけれども、つひに廻らで、いたづらに立てりけり。

の例が『徒然草』五一段にあって、「まわる」「めぐる」とも水車の回転に用いられている。また、『古事記』では

(65) 然らば菩と汝とこの天の御柱を^つ行き廻^りり逢ひて…。

というように「廻り」を「めぐり」と訓読している(岩波文庫1976 p. 20による。『古事記伝』の訓読も同様。)。その「めぐる」が、次第に「まわる」にとって代わられるようになったのであって、次の例はその間の消息を語っている。

(66) 御菜ヲメクリト云 常ニヲマワリト云ハワロシ
(『蜚藻屑』1420年成立。井之口有一他編『尼門跡の言語生活の調査研究』1965 p. 574より)

言語経歴：1955年11月 茨城県日立市生 0歳～23歳 日立市 23歳～24歳
茨城県真壁郡明野町 24歳～東京都目黒区
(東京都立大学院生)

はずむ・はねる

村田ひろみ

1. はじめに

「はずむ」「はねる」は、国立国語研究所1964の「2. 1523走り・飛び・流れなど」の項に分類されている。徳川・宮島1972の「はねる」の項では次のように述べられている。

「はずむ」は主体自身に弾力のあるばあいについていう。たとえばゴムまりのように。「足がはずむ」のような表現もあるが、これは「話がはずむ」「心がはずむ」などの比喩的な表現にちかいものだろう。「はねる」はまりでも、ウマ・ウサギなどの動物でも、火ばなやドロでもいい。つまり弾力がないものにもつかえる。

というように、「はずむ」と「はねる」の違いにつ

いては、主体の性質の違いをあげている。「はずむ」と「はねる」の違いは、この点だけなのか、動作の形態などに相違はないのかということに疑問を感じたので、この二語を比較しながら分析してみようと思う。

2. 自動詞の「はずむ」「はねる」について

2. 1. 動作の形態

まず、「はずむ」を考えてみよう。

(1) まりが 石にぶつかって はずんだ。

(2) まりが 床で はずんだ。

(3) *まりが 天井で はずんだ。

(4) ぼんという乾いた音がしていくつも紙の筒がテープル下へ落ちる。そしてちょっと弾む。(中

野重治「むらぎも」国立国語研究所1972の用例より)

以上の用例から、「はずむ」は、ある物体が落下して他の物体と衝突し、上に向かう動きであると言えるだろう。

これに対して、「はねる」には三通りあると思う。一つは、

- (5) ウサギが 草原で はねている。
- (6) カエルが あぜ道で はねた。

のように、ウサギ・カエル・ウマなどの動物が自力で「はねる」場合である。これは、地面をけることなどによって空中に飛び上がる動作である。二番目は、

- (7) まりが 石にぶつかって はねた。
- (8) 水道の水が はねた。

のように、「はずむ」と同じく、ある物体が落下して他の物体と衝突し、上に向かう場合である。三番目は、

- (9) 油が はねる。
- (10) 泥が はねる。
- (11) どぶ板が はねる。
- (12) 髪の毛が はねる。

などのように、主体自身が落下するのではなく、外部の力によって上に向かう場合である。(9)は、熱している油の中に水滴などが落下し、その水滴が瞬時に加熱して周囲に油を付着させながら飛び出してくるのである。この場合重要なのは、水の落下ではなく、油の加熱という条件であると思うので、ここの用例にあげた。(10)(11)は、足や車などによって地面や板に圧力がかかり、それに反発するように泥や板がもちあがる状態である。(12)は寝癖などにより、髪が途中から上を向いてしまうのである。

動作の方向は両語とも上方である。「はずむ」は、落下して他の物体と衝突するのだから、その反動で上向きになる。「はねる」も、落下して衝突する場合は「はずむ」と同様であり、他の場合も、

- (13) 池の鯉が 水面で はねた。
- (14) *池の鯉が 水の中へ はねた。
- (15) 泥が スカートまで はねた。

などの例から、方向が上向きであることがわかるだろう。また、複合語でも「はねあがる、はねあげる」は言えるが、「はねさがる、はねさげる」とは言わない。次に速度について考えてみる。

- (16) まりが 手から それで 急に はずんだ。
- (17) ??まりが 手から それで ゆっくり はずんだ。
- (18) 水道の水が 勢いよく はねた。

(19) *水道の水が ゆっくり はねた。

のように落下して衝突する場合には、すばやく方向が変わる。また他の場合も、

- (20) バッタが バッと はねて 草むらに 隠れた。
- (21) *バッタが ふんわりと はねて 草むらに 隠れた。
- (22) 油が 急に はねた。
- (23) *油が ゆっくり はねた。

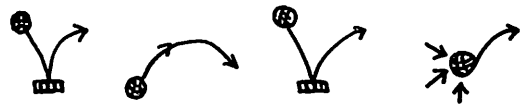
のように、動きは急である。(24)~(28)のように、「はねる」といっしょに用いる擬態語や擬声語を考えてみてもスピード感のあるものが多く、動きが急であることがわかると思う。

- (24) ウサギが ピョンピョン はねている。
- (25) 池で 鯉が パチャと はねた。
- (26) フライパンの上で ごまが ポンポン はねた。
- (27) かまどのなかで 木が パチパチと はねた。
- (28) ぬかるみを歩いたら 泥が ピチャと 足にはねた。

以上のことから、二語の様態をまとめてみよう。まず、「はずむ」は、ある物体が落下して他の物体と衝突し、その際の反動で急に上に向かうことであると考えられる。(図1)次に「はねる」は、ある物体がある場所を急に離れ上に向かうことであり、次の場合に分けられる。

- i) 動物が主体であり、自力で飛び上がる場合。(図2-1)
- ii) 落下して他の物体と衝突することで上に向かう場合。(図2-2)
- iii) 落下以外の外部の力によって上に向かう場合。(図2-3)

図1 図2-1 図2-2 図2-3



「はずむ」と「はねる」のii)の場合、例えば、

- (1) まりが 石にぶつかって はずんだ。
- (7) まりが 石にぶつかって はねた。

は、同じような状態を表わしていると思う。が、(7)の方は、図3のように、石にぶつかってまりが空中をとんでいる様子に視点があるのに対して、(1)の方は、(7)と同様なときと、またもう一つ、図4のように石にぶつかった後にも何度か同じ動きを繰り返すことを表わしている場合もある。この動きは、衝突時のエネルギーが弱まったり、何かが運動を妨げたりしない限り

続くだろう。

図3

図4



このことから、「はずむ」には、運動を繰り返すという特徴があると言えるのではないだろうか。(29)と比べると、(30)は不自然な感じを受けるのもそのためだと思う。

(29) まりが ポンポンと はずんだ。

(30) ? まりが ポンポンと はねた。

(31) *水道の水が はずんだ。

(8) 水道の水が はねた。

(31)が言えない理由として、水は、はねて移動した所にくっついて、再び上にあがることがないので、運動を繰り返さないからだと考えられる。「はずむ」は、運動の繰り返しができないようなもの、例えば、液体を主体にとらないとも言えるだろう。

2. 2. 主体

(32) ボールが はずんで 手から それる。

(33) ボールが はねて 手から それる。

(34) 消しゴムが 机から 落ちて ちょっと はずんだ。

(35) ? 消しゴムが 机から 落ちて ちょっと はねた。

(36) *カンガルーが はずむ。

(37) カンガルーが はねる。

(38) *油が はずむ。

(9) 油が はねる。

(39) *泥が はずむ。

(10) 泥が はねる。

(40) *フライパンの上で ごまが はずむ。

(41) フライパンの上で ごまが はねる。

「はずむ」は、ボールやゴムなど固体で弾力（物体が外力に抗して、もとにもどろうとする力）のあるものが主体になるようである。しかし、(4)の紙の筒や次の(42)の紙くずなどのように、弾力性の有無をあまり意識しないものも主体となる。

(42) 小さく丸めた紙屑を投げたら、紙屑がテーブルの上で ポンポンと はずんだ。

「はずむ」という動詞は、動作の様態の方が重要であり、主体に弾力性があるということは付随的なことなのではないだろうか。また、用例からわかるように、

動作は行為者の意図に関係ないか、あるいは意図と反対の結果になり、非意図的である。

一方、「はねる」の主体は二種類に分けられる。一つは、カンガルーやウサギやカエルなど自らはねる能力を持っている動物で、動作は意志的なものである。もう一つは、油や泥やごまなどのように、弾力の有無に関係なく、何か外部の影響があって「はねる」状態になるもので、無意志的なものである。が、具体物でなければならない。それは、

(43) *光が はねた。

(44) *笑いが はねた。

などのように、形のないものは主体になることができないからである。

また、「はずむ」は主体全体が移動するのに対して、「はねる」は、動物やまりのように主体全体が移動するものと、

(8) 水道の水が はねた。

(12) 髪の毛が はねる。

のように、そうでない場合もあるという違いがある。

2. 3. 比喩・転用

(45) 息が はずむ。

呼吸が速く、激しくなる状態をいう。

(46) 胸が はずむ。

(47) 心が はずむ。

楽しいことなどのために心が浮きたつ様子をいう。

(48) 声が はずむ。

楽しいことなどのために声が平生よりも高い調子で快活な様子をいう。

(49) 話が はずむ。

話が活発に次から次へと続いて、会話が盛り上がっている状態をいう。

(45)~(48)は、一種の興奮状態になり、抑えようとしても抑えきれない勢いに乗った感じを示している。また、(46)~(49)は、楽しくて機嫌が良い時の状態である。比喩的な表現のときの「はずむ」は、平生を基準とすると、その基準よりも上にある状態を示している。体や気持ちやその場の雰囲気、勢いに乗って容易に止めることができないときに使われていると思う。このことは、2.1.で述べたように「はずむ」は、他の物体と衝突した際の勢いがあるかによって抑えられたり、弱められなくなる限り、何度も繰り返される運動であるということと結びつくのではないだろうか。擬態語や擬声語を考えてみても、「ハアーハアー」「ドキドキ」「ウキウキ」「ドンドン」など二拍の語根を繰り返すもの

が用いられ、運動の繰り返しということと何らかの関係があるだろうと思う。

(50) 芝居が はねる。

これは、芝居などのその日の興行が終わることを意味するが、『日本国語大辞典』によれば、芝居小屋の出口の簾を上の方にはね上げたところからでたそうである。

3. 他動詞の「はずむ」「はねる」について

(51) チップを はずむ。

(52) 泥を はねて 走る。

(53) 車が 人をはねる。

(54) 首を はねる。

(55) 不良品を はねる。

(56) 上前を はねる。

まず、「はずむ」の対象物は、チップや祝儀などのお金で、慣用句的に用いられている。(51)は、普段はあげないチップを、あるいは、普段よりも多額のチップを与えることをいう。こういう動作は、平生よりも快活な気分が気前のよくなっているときに起こると思う。これは、2.3. 比喩・転用であげた自動詞の「はずむ」の状態と類似している。

次に「はねる」の対象物は、上前、不良品、人、泥、首などで、慣用句的に用いられることが多い。

個々の用例について考えてみよう。

(52)は、動作主体（例えば、人や馬や車など）が力を加えることで泥をとばしている状態であると言えよう。これは、(10)と同じ状態であり、(57)(58)のような表現もできる。

(10) 泥が はねる。

(57) 泥を はねあげて 走る。

(58) 泥はねを あげて 走る。

(52)よりは、(57)(58)の方がよく使うかもしれない。これ

は、「あげて」がつくことによって表現がより詳しくなるからだろうか。

(53)は、車が人にぶつかって、その人がとばされ、死傷する状態である。「はねとばす、はじきとばす」とも言う。

(54)は、実際に打ち首にする動作としてとらえると、「首を切る」よりも、首を上にとばすような感じを受ける。そして、「首を切る」という意味から、同じように死活問題である「解雇する」という意味が生まれたのであろう。

(55)は、不適格なものを除外することで、比喩的用法と考えられる。

(56)も(55)と同様に比喩的用法であろう。人に渡すべきお金の一部を横取りしてしまうことである。

以上の用例から、「はねる」は、外部から力を加えて、対象物を本来あった位置から取り去ることというのが中心的な意味であると思う。

また、同じ金銭を対象にしている(51)と(56)を比較すると、(51)は、はずまれる人にとって期待や予想を上回る額であり、うれしいことである。しかし、(56)の方は、はねられる人にとって期待や予想を下回る額になってしまい、迷惑なことであるという差がある。「はねる」の他の用例をみても、はねられる人にとっては、望んでいない迷惑なことであるという特徴があると思う。

4. まとめ

二語の中心的意味は次のようになる。

自動詞の場合

はずむ…ある物体（弾力のあるもの）が落下して他の物体に衝突し上へ向かうこと。

はねる…ある物体がある場所を急に離れ上に向かうこと。

<二語の関係>

	動作開始の要因		主体の 弾力性
	他力	落下	
はずむ	+	+	+
はねる	±	±	±

他動詞の場合

はずむ…お金を普段より多く出すこと。

はねる…外部から力を加え、対象物を本来あった位

置から取り去ること。

「はずむ」の用例は少なく、主体に全く弾力性のな

いものは見つからなかった。したがって、自動詞の「はずむ」は、「はねる」の落下の場合の特に主体に弾力性があるという場合に含まれ、「はねる」は「はずむ」を包含していると考えられる。しかし、図4のような繰り返し運動がある場合は、「はねる」よりも「はずむ」の方が自然である。弾力性があれば、図4のような状態になり易いだろう。そこで、弾力性の有無は繰り返し運動の有無に関係していて、他力の場合、

「はねる」は一回の運動であり、「はずむ」は繰り返し運動であるという傾向があるのではないかと思う。

言語経歴：1959年2月 青森県弘前市生。0歳～2歳弘前市。2歳～4歳宮城県仙台市。4歳～東京都立川市。
(東京都立大学学生)

かえす・もどす

大能清子

1. はじめに

国立国語研究所1964では、「かえす」と「もどす」はともに「2.1527往復」に分類されている。この二語は「対象があらかじめ移動または変化したことを前提として、それまでの方向とは逆方向へ対象を移動または変化させる」という意味を共有する。たとえば、

- (1) 図書館に 本を かえす。
- (2) 図書館に 本を もどす。

のような文では、「かえす」「もどす」は同じ行為を表現するものと考えられる。しかし、例文をあげていくと置換のできない場合がかなりある。以下、二語の分析を通して、それぞれの語の意味とその相互の違いを明らかにしてゆきたい。

2. 分析

主体の行為の前後で対象がどのように移動もしくは変化するかによって、大きく三つの場合に分けて考えていくことにする。すなわち、対象の位置を移動させずに方向を変える場合を「反転」、対象を前提となる移動とは逆の方向へ移動させる場合を「逆方向への移動」、対象を前提となる変化以前の状態へと変化させる場合を「もとの状態への変化」とし、この順で分析していく。

2. 1. 反転

- (3) *茶筒を かえす。
- (4) *茶筒を もどす。
- (5) 掌を かえす。
- (6) *掌を もどす。
- (7) きびすを かえす。
- (8) *きびすを もどす。

- (9) フライパンを かえす。
- (10) *フライパンを もどす。
- (11) ラケットを かえす。
- (12) *ラケットを もどす。
- (13) クレープを かえす。
- (14) *クレープを もどす。
- (15) セーターを かえす。
- (16) *セーターを もどす。
- (17) 畑の土を かえす。
- (18) *畑の土を もどす。
- (19) 味噌汁を かえす。
- (20) *味噌汁を もどす。

対象が「掌」、「クレープ」、「フライパン」、「ラケット」等扁平なものの場合、対象を回転させて逆の面を出すことを表わす。回転の角度は一般に180度であるが、ラケット等の手に持つものなら180度未満でもよい。セーター等袋状のものも平面として捉え、内側になっている面を外側に出すことに着目している。対象が踵、手首、土等立体の場合、対象を回転させることによって別の方向に向かせることを表わす。(7)は踵の向いている方向を換え、それによって逆方向へ進むことを表わす。立体のうち、円筒や球体のようにどちらを向いても同じようなものには使用できない。したがって、対象は相対的な前後関係、表裏関係あるいは上下関係をもつものと考えられる。土にはそのような関係はないが、(17)の場合は地表に出ている面を表わすあるいは上とし、それまで見えなかった面を表面に出すことを表わしている。(19)の場合、反転するのは容器であるが、結果として味噌汁をこぼすことになる。

反転の意味では「もどす」を使用することはできない。ただし容器の回転運動をその過程に含んでいても